

「4歳障害児、衰弱死か。母病死後、助け求められず」新聞の大きな見出し。

2ヶ月間、誰にも気づかれなかった親子の死。このような事件を目にする度に切なく、やるせない気持ちになる。病気で動けなくなった母親は、どれだけ我が子が愛おしかったであろう。心の中できっと誰かに助けを求めているはずだ。もし私が出会えていたら、色んな話をしたかった。過去の私が願っていたように「一人じゃないよ」と。同じ障害児の母親として、私は思う。

我が子は出産時の酸素欠乏で障害児となった。首が据わらない、お座りできない、手足が動かない、「できないづくし」だった。生後半年で障害宣告を受け、「将来、言葉を話すことも、歩くことも厳しい」と言われ、未来を絶望した。「神様、私には無理です」と心の中で叫んだ。強い人見知り、延々と続く大泣き、通院や療育のつらい外出、それらを誰にも託せないストレスで、私は半年で20キロ近く痩せ、ベビーカーを押しながら、何度も倒れそうになった。でも「誰か助けて」とは言えなかった。私を支えていたのは子を愛する思いと責任感だった。

親が生きる気力をなくしても、子育ては待ったなし。「育児は育『自』とよく言われるが、娘を育てる過程で、色んな体験をし、娘と共にゆっくりと「お母さん」というものに成長させてもらった。

涙し、悲しみを経験した分、喜びは何百倍にもなって心に届いた。「小さな幸せ」を数えられることが「どれだけ幸せか」を娘は教えてくれた。やがて「できない」ことばかりを数えていた私は、「できること」を数えるようになった。娘の存在をそのままに肯定して、育てて生きたいと思うようになった。一見誉められることがない娘の良いところを一日10個見つけて誉めることを続けた。そして「生まれてきてくれてありがとう」と毎日語りかけた。

娘と私は、入院、手術、リハビリ等、医療と療育には随分お世話になった。たくさんの医療関係者の医療と看護に支えていただいて、今日がある。そして、地元の幼稚園、小学校に学び、娘は明るく物怖じしない子に育った。中学は一人電動車いすで通学し、昨春、高校生となった。

術後手をずっと握ってくれていた看護師。生きる希望を与えてくれた看護師。母のように私に寄り添ってくれた看護師。私にとって、看護とは、生きる力であり、心の支えであった。

娘の高校進学が決まり、私は看護学校への進学を決意した。大変な毎日だが、互いの自立のための、未来への大切なステップだと感じている。将来、私は障害児とその母親をはじめ、高齢者や障害児者、日夜介護する家族を支えられる看護師になりたい。訪問看護師として、地域で孤独な心を支え、共に歩む、看護師になりたいと願っている。私を支え共に歩んで下さったたくさんの皆さんに感謝して。